

『隠岐の文化財』二六号で「クロード・レヴィ＝ストロースの隠岐紀行」という原稿があり、氏の隠岐での様子が解ったが、私にとっては当時、東京に在住していた事もあり、1979年に『構造・神話・労働』が発行されて初めてかすかな消息を知ることになった。隠岐島は柳田国男・折口信夫等、古くから民俗学・民族学のフィールド地域として知られており、その点では調査資料も充実しているエリアではあったが、それらの調査資料も日本の1970年代までの民俗学・民族学であり、レヴィ＝ストロースの方法論である構造主義の視点を考慮したものでは無かった。『構造・神話・労働』を見て、やはり旧来の調査資料ではフォローし得ない処に関心があり、隠岐島の固有性というより、日本文化の一フィールドとして位置付けられている事が諒解された。そこで今回その『構造・神話・労働』の「一民族学者のみた日本」という部分を抜粋して島理解の一助になればと思った次第である。

焼火神社宮司 松浦道仁

『構造・神話・労働』クロード・レヴィ＝ストロース日本講演集（1979 みすず書房 P152、P168）
「一民族学者のみた日本」

五箇山・隠岐・輪島

大橋 この六週間の間、先生は文字どおり寸刻を惜しんで日本文化のいろいろな面をごらんになりましたが、今日は先生が日本についてお感じになられたことを気楽にお話いただきたいと思います。

先生は日本文化の研究が御専門ではないわけですから、どういう点にとくに関心をおもちになり、日本へおいでになられたかを、まずおうかがいします。

レヴィ＝ストロース 第一には、近代化と伝統の問題です。私たち西欧の間は、工業化の道を選んだとき、自分たちの根を絶ち切ってしまうました。今では、そのことを非常に強く意識するようになっていますが、現在の状況はほんとうに悲劇的です。

大橋 過去との断絶は西欧ではそれほど大きいのでしょうか。私たちは、ヨーロッパでは、むしろ伝統の重みを強く感ずるのですけれども。

レヴィ＝ストロース 絶ち切ってしまったと言えば、言い過ぎになるでしょう。より正確には「現在と過去との連帯性を

意識させるものを切り捨てた」と言うべきでしょう。

開発途上国と呼ばれる国々の人たちから、自分たちの文化の将来について、意見を求められることがあります。もつともそれほど頻繁にあることではありませんが。たまたまそういうことがあつたときには、必ず今述べましたようなヨーロッパの誤ちを繰り返してはいけない、それが何より大切だと言うのですが、なかなかわかつてもらえません。近代化のためには、過去の人間的伝統をすべて切り捨てなければならぬ、今まで保ってきた自然との関係を断ち切らなければならない、とどうしても考えがちです。

日本について何よりも大きな関心は、日本文化が自らの過去を完全に破壊することなく、どのようにして近代化を達成したかを自分の目で見ることでした。完全に成功したとは言えないと思いますけれども、かなりの程度に成功したことは確かです。少なくとも、他のどの国よりもうまくなしたとげたと思います。

大橋 それは日本人自身が一世紀あまり前から問い続けてきた問題ですし、またとくに現代の社会では、日本人にとってアクチュアルな、しかも日常的な問題になっていますが、私たち日本人にとつても答えがきまっている問題ではありません。それに、かつては中国文化との接触についても同じような状況の歴史があつたわけです。歴史の事実だけではなくて、考え方にも、時代によって大きな変動があります。先生がそのような動態に興味をおもちになつていらつしやるなら、日本はたしかによい一つの実例になると思います。

レヴィIIストロース ええ。日本を訪れるのは今回がはじめて

なので、もちろん大都会や神社・仏閣も少しは見ましたが、国際交流基金からお招きを受けることになったとき、とくにお願いして、伝統的な職業、手工業が現在どのように生きているかを見ることと、日本の農村、漁村に滞在することを中心にスケジュールを組んでいただきました。

大橋 そういう目的は、ほぼかなえられましたでしょうか。その他のいろいろな日程で、農村、漁村の御滞在が短くなつてしまいました。

レヴィIIストロース 期間は短かつたけれども、よい場所を選んで下さつたので、とても有益でした。五箇山は内陸部の山村の例として、また隠岐は島の漁村の例として。しかし、私にとつて興味があつたのは、一方が農村で他方が漁村だというような対比ではなくて、この両者が近代化に対してそれぞれ独自の態度をとり、それが対照的に違うという点です。五箇山は、合掌造りの家だとか、食事だとか、食事の作法だとか―食事の作法というのは私にとつてはとくに意味があるのですが*―に象徴されるように、伝統的な生活様式が非常に強く残っている地域です。ところが一方では、その谷あいのに大きなダムが作られたり、いままでの曲りくねつた山道に代わる真直ぐな新しい道路を建設する土木工事があちこちで進められていたりして、大騒ぎです。いわば両面の間に不調和がある地域です。

五箇山について、もう一つ重要な点は、若い人がほとんど村を出て行くことです。聞いたところでは、村民の総収入の七〇パーセントは都会からくるそうですね。もつとも現在は若い人がダム

工事の現場で働いているので、少しはましになっているかも知れないということでしたが、ダム建設工事は一時のことではかかりません。

大橋 日本の山村はほとんどどこでもそうですが、その典型的なケースでしょう。

レヴィイストロース ところが隠岐はまったく違います。古い型の家はほとんど見かけませんでしたし、また新しい家もほとんど建っています。それに若い人が出て行かない。

大橋 離島の状況は山村に似ていますが、隠岐の場合ですと、近代化に対応できるだけのサイズの社会と生産物流通の機構がありますね。

レヴィイストロース 私の見たものについて言えば、この二項対立のかけにも一項あつて、三項対立になります。それは輪島で、こここの漁業は隠岐よりずっと古いんですね。これはほんの通りがかりに見た外国人の印象ですから、間違っていたら訂正して下さい。漁獲物の流通範囲が、一部は遠方まで送られるにしても、大部分は隣接地域に限られるような規模の漁業だからかも知れません。輪島の市にも行きましたが、あれはほんとうに見ものです。ところが隠岐の漁業は違っていました。ローカルなマーケットはないに等しい。漁獲物の一部はもちろん自家消費用にあてられるにしても、大部分はすぐに遠方に送り出される。だから経済的には、はるかに近代化しています。全国的な経済の中に組込まれている度合いがずっと大きい。

それから女性の役割が非常に違っていました。輪島では女の人の

の仕事がとても多くて、男よりよく働いているくらいです。とくに市へ売りに行くのは女の仕事で、大きな荷物をもって市へ出かけ、大きな荷物をもって帰ってくる。腰がすっかり曲がってしまったお年寄りまで働いていますね。それから服装でも独特の、すぐそれとわかる服装です。ところが隠岐はまったく違います。漁師のおかみさんたちにもいろいろ話を聞いたのですが、漁業についての男女の分業は輪島とはまったく違って、女性は何もしないわけではないけれども、その役割ははるかに小さい。

結局のところ、一方で五箇山と隠岐、他方で隠岐と輪島という二つの対立、三つの異なった面を通じて、自分が考えていたよりも、日本人の生活がはるかに多様であることを強く印象づけられました。私が見たのは、ほんの一隅にすぎませんが、それでもこんなに違っているのですから。

★富山県東礪波郡上平村及び平村。

★『神話論』第三巻は「食事作法の起原」と題されている。

伝統と現代の調和

大橋 ごらんになられたことを通じて、日本人の労働の組織の仕方について、とくにお気づきになられたことがございますか。

レヴィイストロース やはり女性の役割ですね。隠岐で聞いたのですが、漁業だけをやっているところもあるけれども、半農半漁のところもたくさんあるでしょう。漁業協同組合に加入してい

ますから本當の漁民であるのに、一方では農業をやっているとい
うので、どういふふうに仕事を分けているのかと尋ねたわけです。
すると男は漁に出て、女が田で働くんだという返事なんです。ね。
しかも隠岐だけのことでなくて、本州でも同じだそうで、これ
は思いがけないことでした。さきにも言いましたように、日本で
の男女の分業の問題には非常に興味をもっています。とくに伝統
産業の場合には特徴的です。輪島に四日間いて、漆器を作ってい
る人たちに親切にしてくださいましてね。あらゆる仕事のすみず
みまで、自分たちで案内して見せて下さったのです。そこでは夫
婦の共同作業の多いことが印象的でした。夫婦単位の仕事といっ
ても、その形はさまざまで、たとえば沈金では、夫が彫って、妻
がそれに金を埋めるといふ分業形態ですが、蒔絵の方は妻も夫と
ほぼ同じ仕事をする。しかし、夫の方が主になって、妻はその助
手をつとめるといふ関係です。

もちろん伝統的な手工業が生き続けている鍵の一つに、製造法
の近代化を行なって、それを昔からの技術にうまく調和させてい
ることがあります。たとえば蒔絵に使う金箔を作るところを見せ
てもらいましたが、そこでは金箔製造に使う紙の作り方には、い
ろいろ秘伝があるんです。ところが金箔を打つのはエアハンマー
でやっている。輪島塗の木地作りも同じで、大ざっぱな仕事は電
動のロクロで片づけて、そのあと微妙なところを手でやるわけ
ですね。

しかしながら、重要なもう一つの鍵は、生産過程の家族的構造
にあるのではありませんか。漆器でしたら、夫婦のほかには、見習

を含めて若い人たちが二、三人加わる程度で、しかも若い人は住
み込みが多く、家族の一員のように扱われている。そして主人は
その人たちの修養にも責任をもつ。まあこういう型があるでしょ
う。ですから漆器製造業といつても、建物はふつうの民家か、そ
れより少し大きい程度ですね。訪問をしますと、まず一しきり説
明して下さって「さてそれでは工場を見ていただきましょうか」
ということになる。「工場」というから何十人も働いている人が
いるのかと思うと、そうではないのです。しかし、そういう単位
が集まって漆器産業が成り立っているわけです。

一般的に言えば、ヨーロッパの人間が日本に来てまず驚くのは、
まず第一に人間の多さ、人口密度の高さですけれども、それをそ
のまま単に労働力として見てしまうだけではいけません。その中
にどのような小さな単位があつて、それがどのようにうまく機能
しているのかということを見なくてはならないのではないかと思
います。そのような社会的単位を維持してゆくキャパシティーに
日本の独自性があるのではないですか。

大橋 いま輪島塗についておっしゃられたことは、ヨーロッパ
の手工業についても同様に見られるではありませんか。

レヴィイストロース いいや、もうありませんね。ヨーロッパ
では、一九世紀にはまだ見られたでしょうが、今では、労働はす
でに完全に個人に分解してしまっています。私は職人をたくさん
知っていますけれども、もう誰も弟子をとろうとはしません。一
つには、社会保障費の雇用者負担が重いことも理由になっていま
す。

大橋 私は詳しいことを知らないんですけれども、日本でも社会保障の負担をせずに人を雇うことはできないんです。もちろんその負担の重さに違いはあるでしょうが。

レヴィIIストロース もし日本で、伝統産業の後継者養成と社会保障負担の矛盾に何かうまい解決方法がとられているならば、ぜひ教えてもらいたいですね。しかし、それより大切なのは、職人自身が自分の仕事にどれだけ誇りをもっているかということだと思います。ヨーロッパでしたら、現に手工業に従事しているとしても、できれば他の仕事に変わりたいと思っている人が多いのです。

大橋 伝統産業も需要がなければ成り立たないわけですが、現代の日本には文化的二重性の意識があつて、固有文化であるがゆえの価値づけがはつきりできていることが支えになっていると思います。西欧でも、フランスなどは昔から職人の腕に対する評価が高い国ですが、伝統技術や職人気質は、一般の工業化の流れに吸収されて、その中に生き続けていると思います……。

レヴィIIストロース 需要が一つの重要な条件になっていることはたしかですね。輪島で漆器を見たときに、高級品の値段が高いのには驚きました。しかし、それでも需要がある。日本の漆器というのは、ヨーロッパの銀製品にあたりますね。ところがその漆器でも、私が日本に着いた翌々日に東京国立博物館の「東洋の漆工芸特別展」で見た逸品には比べようがありません。あのような作品が再び作られるための条件は今はないでしょう。

きものでも同様で、金沢や京都で作るところを見せてもらいま

したが、大変な手数をかけているのに驚きました。ヨーロッパできものに相当するのは、ルイ王朝時代の刺繍で装飾をほどこした衣裳というところでしょうか。とにかく、現在ではそれにあたるものはありません。

大橋 きものの値段が高いことには、外国人はよく驚きますね。きものは伝統文化と現代生活との関係を説明するのにとでもわかりやすい例です。現代のように洋装が普及している中で和服を着るということは、単に前時代の遺物とか、保守性とか、あるいは過去への郷愁ということではなくて、昔とは違った意味をもつようになっています。新しい衣裳のシステムができ、その中で和服に新しい機能が与えられているのです。

レヴィIIストロース よくわかります。私の言いたいのもそういうことです。もちろんフランスでも、すぐれた伝統工芸の技術者が残っていないわけではありませんし、また尊重されています。しかし、それを組み込んだ社会構造はありません。ところが、日本は伝統産業の存在を可能にし、かつ維持してゆくような社会構造をもっている。それが大切です。日本では、伝統工芸に限らず、一般に、過去の文化と現在との間に安定した関係、一種の均衡が保たれていると思います。私がとくに關心をもつのは、その点なのです。

日本文化の混質性

大橋 それに関連しておうかがいしたいのですが、先生は文化の混質性ということをご考えになりますか。日本は中国文化を受け入れ、明治以降は西欧文化を取り入れたので、私たちは自らのアイデンティティーの問題としてそのことを意識しがちですし、他方では西洋文化を全面的に採用したわけではありませんで、なにか皮相的な西欧化をしているという後めたさを感じる人もあります。私自身としては、日本文化は『野生の思考』にお書きになられたブリコラージュで、他のシステムからもってきた要素を使って、つねにそれなりに完結した一つのシステムを作り上げてきましたし、また文化変容とは一般にそういうものだと考えています……。

レヴィーストロー あらゆる文化は混質的です。フランス文化も同じです。その基盤は、ケルト文化、ローマ文化、ゲルマン文化でできています。さらにユダヤ・キリスト教的伝統が加わっています。

大橋 他の文化というのは単一的に見えやすいんですね。

レヴィーストロー 日本文化が外来要素を受け入れながら、独自のシステムを作り上げていることがいちばんよくわかるのは美術ではありませんか。中国の影響を受けながら、それとは違う、他のどこにも見られない美術を完成させました。美的感覚というのは、いちばん根の深いものです。伝統的な日本文化と考えられ

るものが混質的なのはよくわかります。とくに伊勢神宮へ行つたとき、あの簡素さ、荘厳さ、純粹さに日本古来のものがあることを強く感じました。日本は仏教国だと言われていますが、伊勢神宮は、インド起原の仏教とは、本来非常に異質ですね。ところが、結婚式は神社で、葬式は寺院でというような生活が成り立っているのが日本です。神道と仏教、固有文化と中国からもたらされた文化との間に隔絶的な仕切りがないことのほかに、宗教生活と日常生活との間にも絶対的な仕切りがないことにも気がつきました。聖と俗とがあまりはつきり切り離されていない。ヨーロッパでしたら、カトリックでもプロテスタントでも、聖俗の区別が厳格です。

隠岐の浦郷で、たまたま漁船の進水式に出会いました。食堂に入りますと、今日は進水式があつて、その予約があるので席がないと言わねえですね。食堂といっても、テーブルが一つしかない小さな店で、フランスならばビストロというところですね。ほかに行くところもありませんでしたし、ちょうどよい機会だと思いましたが、頼んで同じテーブルに坐らせてもらいました。そうしましたら仲間に入れてくれましたね。私にとっては、庶民的な、お祝いのときの食事がどんなものかわかりましたので、大変面白かったのですが、いま話をするのはその後のことです。食事がすむと、式をやるからと言うので、他の人と一緒に歩いて、小さな造船所に行きました。船の上には船主とその奥さんとその弟の船大工と、それから神主さんが乗って、実に真剣で厳かな式が行われました。ところがまわりの人びとは、親戚の人とか村の仲間

すが、まったくのんきなもので、しゃべったり、ふざけたりしているんですね。宗教儀式なのか、それともそうでないのかということが問題にならないように見えました。ヨーロッパでは考えられないことです。

それから吉田禎吾東大教授が去年調査に行かれた漁村を訪れまして、神主さんのところへ話を聞きに行きました。ところが、そこは家と神社が一緒になってしまっただけ。二部屋ありまして、一つが宗教行事にあてられ、もう一つは私生活のためということになっているのですけれども、それがまったく一つになっているんです。聖の部分と俗の部分が切り離されずに、結びついている。これもまたヨーロッパではありえないことです。

大橋 俗の結合ということをどう解釈するかということにも関係がありますが、一般に、西欧の人には、日本人の生活が宗教性の強いものに見えることが多いと思います。神社にはたくさんの方が参詣していますし、ビルの屋上に烏居があつたりします。だからと言って、キリスト教とか、イスラムのイメージをそれに重ねて判断すると間違えることになります。つまり、他方では、日本ほど宗教的に行動を制約されない国は珍しいと思います。結婚にせよ、教育にせよ、政治にせよ、いろいろな文化を受け入れた結果でできるのは、それらの要素の混合物ではなくて、一段高い次元で異なるものかも知れません。ですから、たとえば非寛容の宗教が日本で成功する可能性は、非常に少ないと思います。

レヴィーストロー そうかも知れませんが、だからと言って日本人が非宗教的だということではありませんね。超自然的なもの、

超越的なものに対する畏敬の念は非常に強いでしょう。五箇山で泊めていただいたのは村長さんのお宅でしたが、私たちが寝た部屋に神棚がありまして、奥さんが朝、水と卵一つをもって入ってこれ、それを供えてお祈りをして行かれました。祀つてある神様は竜で、毎朝、水と卵を新しいものに替えるという話でした。超自然がすぐ身近なところにあるのを感じましたね。漁村でも同じで、漁業そのものは近代化しても、宗教的儀礼は非常に盛んでしょう。

大橋 今おっしゃられたような宗教性がないという意味ではなく、宗教と文化的、社会的変革との矛盾をどう解決するかという一般的な問題に対して、日本なりの解決ができていくということ。宗教が近代化を阻んでいる国はたくさんあります。複雑な問題で、あまり単純化はできませんが、宗教一つ一つの性質はかに別にしても、日本の場合、いろいろな宗教を受け入れた結果、宗教的寛容度が高くなっていることと近代化とは無関係ではないと思います。

自然を人間化する

レヴィーストロー 日本で印象深いことの一つは、日本の風景です。短期間の滞在なので、もちろん日本のごく一部を見たにすぎません。それでも、東海道は新幹線でしたが、京都から信楽や大和の山の中へ車で行きましたし、輪島から志摩まで一〇日ほどかけて車で本州を横断しました。東京から金沢、大阪から隠岐

の間は、飛行機の窓から下がよく見えました。隠岐では島をずっと船で回り、フェリーで帰りましたので、いろいろな日本の風景に接することができたと思います。日本にもなかなか雄大な景観がありますね。金沢から五箇山へ抜けるとき通った新しいスーパー林道からの眺めとか、隠岐の海岸線とか、今まで見たことのないとても美しい景色でした。私のノートのどこかに、「日本では風景もカリグラフィ（書道）だ」と書いてあります。とにかく山の稜線が美しい。それに地質のせいでも、山が岩でできている所は少なく、ふつうは土質ですから、彫りが違ってきます。

私は幼いときからずっと日本の美術に親しみをもってきました。日本は、日本の絵画に出てくる風景は、画家が自分の夢想する自然を描いたものだと思ひ込んでいました。ところが日本に来て、それがけっして夢想ではなく現実の風景だということがよくわかりました。しかし、だからと言って、描かれた自然が象徴性を持ち、しかも哲学的意味をもっていることに変わりありません。つまり、現実の自然の要素を使って、自然を表現する一つのシステムを日本の絵画は作り上げているわけです。同じことは、社会生活一般についても、ある程度言えるのではないのでしょうか。社会生活ですから、自然の要素ではなくて生活の要素ですけれども、日本ではそのさまざま生活の要素が、がっちりとしたシステムにまとめ上げられています。それが日本文化の力です。日本文化は、そういうシステムを作り上げる力として、理解すべきではないかと思ひます。

大橋 よく言われるように、西洋では自然 nature と文化

culture とを対立させて、文化だけで一つのシステムとして考えますけれども、日本では、自然と人間とをまとめて、つまり自然と文化を切り離さずに一つのシステムにしていると言えます。そして日本の家屋とか庭園とかがよく例にあげられます。自然に対する人間の態度、働きかけ方にも違いがあると感じられましたか。

レヴィIIストロース 私の印象では、日本では自然を人間化する、自然に人間の意味を与えようとしているのではないのでしょうか。自然と言っているものが、実際には必ずしも、手を加えられていないままの本当の自然ではありませんね。

大橋 そうなんです。日本では、本当の原生林とか原野はもうほとんど残っておりませんし、ごらんになられた風景は、庭園の場合とはむしろ違うにしても、多かれ少なかれ人間が作った風景です。海岸の松並木にしても、山の杉林や竹林にしても、ですから、先生が絵を見て、これは画家が想像力で作った風景だと考えられ、実際にごらんになると現実に非常に近いということは、その意味では当然なんです。山野が、人間の与えようとした姿にこれほど従うようになっていまして、国立公園などに、例外的に手の加えられていた自然が残っているとしても、それも人間の意志の結果と考えて差支えないということになります。フランスでしたら、自然保護が文化庁の管轄になるというのはまったく考えられないことでしょうか、日本ではほとんど誰も驚きません。

レヴィIIストロース 日本で、私が調べて面白かったことの一つは料理です。御存知の通り、一般に民族学者は研究対象の民族

がどんなものを食べているか、どんな調理法を使っているかを調べますが、私の主な関心はそれとは異なっており、日本料理の「文法」とでもいえるべきものを取り出すことでした。京都では、ある料理屋で板前さんに、献立の構成から、調理して客に出すサービスの仕方、順序など、きまっていることについて何もかも詳しく説明してもらいましたし、またいろいろ質問して資料も集めました。ところが、隠岐の旅館に泊ってみて驚いたことは、料理の出し方がまるで違うことでした。京都の料亭では、サービスが完全に通時的で、何のつぎに何が出てくるということがきまっています。いましたが、隠岐の宿では、いろいろの御馳走が一度に運ばれてきて並べられました。驚いて尋ねますと、ここでは順序なんかははじめからなく、ただ配置だけが大切だという話でした。右に置くべきものは右に、左に置くべきものは左に置かなければならない。それはきっちりきめられている。つまり規則は完全に共時的です。

大橋 地域による違いではなくて、旅館ではサービスの人手が足りないという問題もあるかと思いますが、通時的なものがいかに共時態にルール化されているかを考えるのは面白いですね。

レヴィンストロース もちろん、通時態なしに共時態は考えられません。

大橋 また通時的サービスの場合でも、一つ一つの料理の構成とか、器との組合せとか、置き方とか、やはり共時的ルールはきまっているわけですね。

天明五年におきた海難事故の記録（古文書解説）

海士町古文書教室

再開された海士町古文書教室では、六月から十一月は、松本美和子先生の懇切な指導による講読、十二月から五月までは会員による輪読を行っています。

海士町には江戸時代後期、大庄屋であった村上家、村尾家、渡辺家に多くの近世文書が残されていますが、渡辺家（中良）から海士町歴史民俗資料館（現 後鳥羽院資料館）に寄贈された古文書をテキストとして使用し学習しています。

隠岐選出の衆議院議員として活躍し、隠岐汽船株式会社初代社長でもあった渡辺新太郎は、この渡辺家の出身です。

今回紹介する文書は、天明五年（一七八五）、正月魚の鰯を搬送中に美保関・七類浦で起きた痛ましい海難事故の記録です。

また二年間学んできた海士町古文書教室の生涯学習の記録でもあり、ご指導を頂ている松本先生に心から感謝いたします。

（海士町古文書教室 榊原 信也記）

天明五巳十二月

隠州嶋前崎村難船一途口上書控

船往來写し

御料松平出羽守預かり隠州嶋前崎村覚右衛門船二人乗り
船頭水主宗門堅く相改め出船申し付け候条、津々浦々
滞り無く御通し成さる可く候、仍て件の如し

天明五年巳正月

松平出羽守内

雨森扇藏

諸国御関所

御番衆中

差上申口上之覚

一 隠州嶋前海士郡崎村舟頭覚右衛門船水主ともに三人乗り壹艘、同所船頭伊三郎舟水主共に四人乗り壹艘、同所船頭源七舟水主ともに三人乗り壹艘、都合三艘、此の度商売の為、鰯積み請け今月十三日辰の刻時分同所出帆仕り、御当地三保関辺りを心懸け渡海仕り候途、沖相にて戌亥の風手ひどく吹出し、波高く小船の儀に御座候えば、双方より波打込み、沖相にて三艘共に既に危なく相成り、積荷の内追々刎ね捨て申し候えども、風波弥増し波打ち掛け候故、船浮き立ち申さず、色々相凌ぎ漸々右三艘共御当浦沖相に懸け留め候処、船頭源七船、船頭伊三郎船、此の二艘の分は、同

夜子の刻時分、綱摺り切れ岩瀬に懸け終には破船仕り、剩
え右船頭水主七人残らず相果て船は当分に散乱仕り、積荷
の鰯は沈荷に御座候故、是又荒波の儀に御座候えは流失仕
り、私舟も既に洩れ沈み申す体に罷り成り候処、翌十四日
明け方に相成り候ても風波止むを得ず、夜中相働き勞れ罷
り在り候処へ、御当所衆中助船数艘御出し下され候えども
中々懸け留め候場所へは近寄り難く御座候えども御助船と
見懸け船中力を得候内、程無く御手段を以て元船へ御乗移
り下され数々御介抱御勞りの上、御当浦へ御漕込み下され
御影故助命仕り重々有難く存じ奉り候、御当浦宿主出店屋
平蔵方へ上り宿主は申し上げるに及ばず、所御役人様方其
の外村方衆中御勞り下され、早速御番所様猶又御城府へも
仰せ上げられ候旨に付いて、御役人様方七類へ御越し船往
来御覽成され、類船の私共一統の口上一々御吟味の上、猶
又船頭水主の内、病人又は怪我等仕り候者はこれ無き哉と
御心付け為されお勞り下され有難く存じ奉り候、私乗組み
船頭水主三人共に別条御座無く候、則ち船往來写し仕り差
上げ申し候、私元船船具共に少しも紛失損じ御座無く候乍
ら、此の上用事等これ有り候はば遠慮無く申し出すべき旨、
破船以後御当浦へ対し何ぞ疑わしき不審の儀もこれ有り申
し出で候えば御吟味の上御糺し下さるべき旨、將又積荷其
の外破船の船具船槽、当浦は勿論近浦へも流れ寄り候はば

早々差し出し候様、近浦へ御触等迄御出し下され候段、仰
せ聞かされ万端残り無き所御念を入れさせられ有難く承知
仕り候、しかし乍ら積荷の鰯は沈み、荷物船具船槽の儀は
当分細々に打ち碎かれ流失仕り候と相見え候間、如何成し
下さるべき様も御座無く、此の上少しも申し分御座無く候、
積荷は私買受け候鰯、殊に直乗船頭に御座候えは御当国
御上様へ御苦勞に罷り成り候儀恐れ入り存じ奉り候間、積
荷勿ね捨て候証拠御書付浦状頂戴仕り候に及び申し上げず
片時も早罷り歸りたく存じ奉り候、右破船二艘の舟頭水
主七人残らず溺死並に私船積荷勿ね捨て候一件に付、万一
如何様の儀出来仕り候とも私共より急度御請相申し披き仕
り御当所へ難渋を掛け申し上げ間じく候、然る上は片時も
急々罷り歸り候様幾重にも願ひ奉り候

一 私船三人乗組みと御訴え申し上げ候処、船往來には二人
乗りとこれ有り候に付いて御尋ねの趣御尤も御儀承知仕り
候、此の儀は御国元出船の節、水主の内一人若輩者御座候
に付覚束無く存じ奉り用心の為水主一人相増し都合三人乗
り組、出船仕り候、此の段御聞き届け下さるべき候

一 塩鰯百五拾本

内

式拾三本 勿ね残り船中に有り

残り百式拾七本 海中へ刎ね捨て候

船頭伊三郎船乗組

船頭 伊三郎

水主 熊三郎

同 伝八

同 助兵衛

船頭源七船乗組

船頭 源七

水主 夫三郎

同 善四郎

右式艘破船頭水主残らず溺死仕り候処、伊三郎船水主の内、助兵衛と申す者の死骸流れ居り候を御当浦衆中より御引上げ下され、昼夜番人等仰せ付け置かれ有難く存じ奉り候、然る処、右助兵衛儀は水主吉左衛門兄に御座候、何卒右死骸御当所常楽寺へ相頼み身隠し成し下され候様、御頼み申し上げ度存じ奉り候、尤も助兵衛宗旨の儀は隠州嶋前布施村浄土宗長福寺旦那に御座候、右宗門の儀は私共連判一統御請け相申し上げ候、此の段御許容願ひ上げ奉り候、残り六人の死骸追々御尋ね下され候えども流失仕り見当たり申し上げず候、万一此以後右死骸御見当り御取上げ下さ

れ候とも隠州へ御通達には決しておよび申し上げず候間、宿主平蔵より御当浦常楽寺へ身隠し下され候様、右平蔵へ能々相頼み申し合わせ置き候間、此の中御取揚げ下され候、助兵衛死骸身隠し仰せ付けられ候えば右同様の御取引下さるべく頼み奉り候、

一 船中に御座候刎ね残りの鰯式拾三本の分わずかの物に御座候えども追々日数を経候ては損じ、強いて片時も急々御当浦にて売り払い申し度願ひ奉り候、類船の破船式艘船頭水主七人残らず溺死仕り候段各様より証拠御書付仰せ付けられ候はば片時も急々罷り帰り度存じ奉り候間、此の段宜敷願ひ上げ奉り候、以上

十二月十九日

隠州嶋前崎村覚右衛門船

炊 又十郎

水主 吉左衛門

船頭 覚右衛門

七類浦出店屋

宿主 平蔵

庄屋惣右衛門殿

年寄源七殿

右は隠州嶋前崎村船頭覚右衛門船水主共に三人乗り壹艘、

船頭伊三郎舟水主共に四人乗り壹艘、船頭源七舟水主共に三人乗り壹艘、右類船三艘商売の為、鰯積み請け今月十三日辰刻時分同所出帆、三保関辺りを心懸け渡海仕り候由、同日酉刻時分七類浦沖一目島と申す処に懸け留め候由の処、荒磯殊に風波強く右類船の内、船頭伊三郎船、船頭源七船、此の二艘綱摺り切れ岩瀬に懸け当分に打ち碎き、荷物は勿論船具舟槽に至迄残らず散乱流失仕り候、船頭覚右衛門船の分は翌十四日明け方迄運能く懸け留め居り候を見懸け、助船数艘差出し、船頭水主三人共助上げ、元船も灘へ漕ぎ込み困い置き候、番人申し付け置き候、然る処溺死七人の内、伊三郎船水主助兵衛と申す者死骸懸け揚げ申し、昼夜地下番並に船手より添番申し付け置き候、右破船の趣、宿主を以て訴え出候に付、船頭覚右衛門水主共吟味仕り候処、委細前書通り相違御座無く候、且つ又助兵衛死骸の儀前段に願ひ出候通り、当浦禪宗常楽寺へ相頼み身隠し御願ひ申し上げ度段、船頭水主共一統願ひ出申し候間、願ひの通り御許容仰せ付けられ候はば元船にこれ有り候、残りの鰯、覚右衛門自分荷物に御座候えは、御下知仰せ付けられ次第勝手に売り払い、浦状には及び申さず候えども破船式艘の船頭水主七人の溺死一件、銘々共よりの証拠書付相渡し候えは急々帰国仕り度段願ひ出申し候、此の段宜敷仰せ上げられ下さるべく願ひ奉り候、以上

年寄 源七

庄屋 惣右衛門

川上幾左衛門殿

森甚助殿

下郡次左衛門殿

組頭友助殿

右の通り訴え出候に付き、私共早速罷り越し吟味仕り、口上書取御往進申し上げ候、尤も溺死助兵衛死骸の儀、船頭水主より願ひ出候通り、七類浦禪宗常楽寺相頼み、身隠し仕り度き旨願ひの通り仰せ付けさせられ下され候はば、常楽寺当て葬り御差紙仰せ付けさせられ候様仰せ奉り候、以上

十二月

組頭 友助

下郡次左衛門

森甚助

川上幾右衛門

小川市太夫様

解題

今回翻刻する史料は『隠岐 斎藤家古文書目録』（平成十四年三月発行）のNo765である。

斎藤家は大久村（おおく）（現隠岐の島町大久）で代々庄屋を務めてきた家で、千点以上の所蔵文書を昭和五十三年に当主修二郎氏が島根県立図書館に寄贈された。

史料『諸色直段極メ之覚』は22・5cm×16・5cmの帳面で表紙共九枚。物品の値段は『新修島根県史料篇2近世上』などにも掲載されているが、職人の賃金や農具の値段などが細かく示されているのは珍しい。享保九年二月、米価が下落したため、幕府は物価（諸色元値）の引き下げを命じた。米將軍と呼ばれた徳川吉宗は、諸色引き下げと並行して、米価を引き上げを推進した。それまで米価変動に追従していた物価が米価安で物価高となり、経済の揺らぎが生じてきたのである。この史料はその政策初期の頃のものである。

松本美和子（島前古文書教室講師）

享保九年

諸色直段極メ之覚

辰閏四月朔日

覚

一、船大工賃

一、家大工賃

一、木挽賃

一、桶大工賃

一、鍛冶賃

上 九拾文

中 七拾弍文

下 六拾文

上 八拾四文

中 六拾六文

下 五拾四文

上 六拾六文

中 五拾四文

下 見合

上 八拾四文

中 六拾六文

下 五拾四文

上 八拾四文

中 七拾弍文

下 六拾文

但鍛冶一日雇申時右之通り

外に弟子雇之者五拾四文

取り可申候、古法之通り如斯

一、小手安釘打立壹貫めニ付錢四百文

但大手安以上釘ハ右格を以可相極

一、五寸釘裏判 壹匁ニ付 拾八本

一、四寸釘ハ 壹匁ニ 貳拾四本

一、三寸五分釘ハ 壹匁ニ 貳拾八本

一、三寸釘ハ 壹匁ニ 三拾貳本

一、貳寸五分釘ハ 壹匁ニ 八拾本

一、貳寸釘ハ 壹匁ニ 百本

一、貳寸釘ハ 壹匁ニ 百四拾本

一、壹寸五分釘ハ 壹匁ニ 百九拾本

一、戸はき釘ハ 壹匁ニ 貳百四拾本

一、大鍬壹具 代貳百廿文

一、中鍬壹具 代百七拾文

一、大まさかり壹丁 代貳百貳拾文

一、中まさかり小まさかり右ニ准しへし

一、大きかま壹丁 代百三拾文

但大なた小なた

右ニ准可下ル

一、大かま壹丁 代六拾六文

一、稲刈かま壹丁 代五拾文

其外鍬さき、まさかりさき、のミ、包丁

其外諸色右ニ准可下之

一、紺屋染ちん之義難積候間、近年の染賃

貳割下り

一、薪壹ノ 代七拾五文

一、材木、板、竹類御用材木并下ニ而商売材木共

其所相場ニ壹割下り

一、上酒壹升ニ付 代錢七拾貳文

但唯今相場高直ニ候得者此度他国酒

上り可申と相積如此

一、鍛冶屋炭 壹俵代廿七文

一、豆腐壹挺 代拾文

一、肴類午世売直段ニ貳割下り

但あいもの類い相對次第

一、ほし椎茸、木くらげ。かや たはこ

其外諸商売物右ニ准し可下之

一、町方見せ売物其外籠売等ニ至迄

諸色直段他国より下直ニ調候間、是又

右に准し下直に賣せ可申候事

一、水主賃

松江へ壹貫百文

但九月より正月迄壹貫三百文

米子 壹貫文

但九月より正月迄壹貫貳百文

因幡へ壹貫文

若狭 壹貫百文

但敦賀へも右同断

三国 壹貫三百文

浜田 壹貫文

萩 壹貫貳百文

但瀬戸崎同断

下関 壹貫四百文

筑前 壹貫六百文

其外右二見合次第

但、小渡海舟より百石迄の舟二ハ、平生賃銭下直可有之候間相对次第

右ハ此度從御上諸色直段並

諸職人賃銭之義、米穀下直ニ准シ

相下ケ商賣致候様ニ被為仰付候御觸之

趣奉畏候、依之、嶋中相談之

上、右之通り諸色直段相積相下ケ

申候、村中急度申渡相守可申候

若違背仕候者有之候者、何分之

越度ニ茂可被仰付候、以上

享保九年辰七月

越智郡

大庄屋 十太夫殿
大庄屋 清十良殿

右之通り今度御觸に付、諸色相下ケ申所如此御座候

大庄屋 清十良

大庄屋 十太夫

福嶋五左衛門様

庄屋年寄印刻有之分

御役所上ケ申候

態申觸候、然者、今度御觸ニ付諸色直段

各先日御寄合ニ而御極被成候通り可然

候間、

諸色極書之通り村中諸職人ハ不及

申、籠荷ひ。諸商賣人。小百姓。水吞

迄不殘御寄せ、急度御申渡違背無

之様ニ御申付可被成候、尤、先日之御觸書

とくと読聞せ可被成、承知仕候様に

可被成候

一、当春隠州御郡代瀧波与市右衛門様、宮川

様代り被仰付候依之村々に而与市右門と

申名替へ候様ニ御申付可被成候

一、此廻状順々に御回し、村下ニ印形被成

留村より早々御戻し可被成候

大庄屋 清十良

大庄屋 十太夫

目貫より小路迄

年寄
庄屋

新刊紹介

書名・近代日本の地方統治と「島嶼」

著者・高江洲昌哉

出版社・株式会社ゆまに書房

出版年・二〇〇九年十一月

近代日本の地方制度上特例である五つの「島嶼」の地方制度を紹介。隠岐については、島嶼地方制度域に組み込まれていく過程を紹介している。

書名・元禄覚書

著者・大西俊輝、權五嘩

出版年・二〇〇九年

元禄九年に朝鮮人の安龍福など十一人の一行が鳥取藩に向かう途中、隠岐に立ち寄った記録を韓国語と日本語で紹介している。

書名・島根の民謡

著者・酒井董美・藤井浩基

出版社・三弥井書店

出版年・二〇〇九年八月

朝日新聞島根版に連載されたものをまとめたものである。取り上げている民謡は白挽き歌や田植え唄、大漁歌、盆踊り歌などが主なものであり楽譜CD付き、隠岐の歌は二十三曲紹介している。

書名・大津皇子怨念の歌 柿本人麻呂を探して

著者・井上智幸

出版社・文芸社

出版年・二〇〇九年六月

大津皇子の謀反は無実であったとの解釈を紹介している。柿本人麻呂の息子躬都良が大津皇子の陰謀に連座して隠岐に流されたという伝説について、人麻呂の歌に息子への思いが隠されているなどの新解釈を展開している。

書名・ホシミスジ隠岐個体群の成虫の発生消長と生息空間

著者・近藤万里、星川和夫

発行・ホシザキグリーン財団研究報告、第12号2291234

頁別刷

二〇〇八年五月二十七日から七月二十八日まで、西の島町外浜でおこなった。ホシミスジの野外調査の報告書である。

書名・竹島問題に関する調査研究報告書平成二十年度

編集・発行・島根県総務部総務課

発行・平成二十一年十月

「竹島問題を学ぶ講座」や「中井洋三郎と竹島」特別展などの平成20年度web竹島問題研究所の活動内容をまとめたものである。

書名・地元の食材を生かした献立集

発行・隠岐の島町食生活改善推進委員会等

発行日・平成二十一年三月

くろえのご飯、いかカレーなどの地元の食材をいかした40種類の献立を紹介している。

書名・季節のめぐりの中で梅しごと

著者・中村成子

出版社・文化出版局

発行日・二〇〇九年五月

梅酒、梅干し、梅干し料理等の紹介。「二粒の梅に導かれて蘇婆訶梅林」と題し海士町で取り組んでいる有機農法での梅の実の栽培と、地産の塩で漬けこんだ本物の梅干し作りなどを紹介している。

書名・島根の神楽芸能と祭儀

編集・島根県立古代歴史出雲博物館

発行・日本写真出版

発行日・平成二十二年二月五日

島根県立古代出雲歴史博物館の企画展「島根の神楽―芸能と祭儀―」の展示解説図録である。出雲、石見、隠岐の神楽や死者供養の神楽などが紹介している。

書名・日本地方地質誌中国地方

編集・日本地質学会

発行・株式会社朝倉書店

発行日・二〇〇九年九月五日

日本地質学会が全八巻に分けて日本列島の地質を紹介しているシリーズの中国地方巻が発刊された。隠岐の地質については新第三系や隠岐変成岩などが紹介されている。

書名・神楽と出会う本

著者・三上敏視

発行・アルテスパブリッシング

発行日・二〇〇九年十月三十日

全国25ヶ所の神楽を紹介。旧来の民俗学的な紹介でなく、音楽家から見た神楽の楽しみ方を紹介したもの。隠岐島前神楽の項目だけでなく、随所に島前神楽の記述がある。

書名・しおさい

著者・森脇松枝

発行日・二〇〇九年四月一日

山陰中央新報の読書投稿欄「こだま」に2004年から2009年間、掲載された著者の文章を自費出版としてまとめたものである。

書名・句集・潮騒

著者・脇坂あや女

発行・日本伝統俳句協会山陰協議会山陰発行所

発行日・平成二十一年三月一日

昭和五十六年から平成十九年までの二十七年間にわたる長い句業の成果をまとめたものである。

書名・日本の島を旅する

著者・安村晃一

発行・株式会社奈良新聞社

発行日・二〇〇九年四月二十日

奈良新聞に二〇〇六年八月から二〇〇八年八月まで五十回にわたり連載されたものである。全国二十五の離島を紹介。隠岐は島後のおみそばや黒耀石の八幡さんと知夫里島の赤壁などを紹介している。

書名・日経スペシャル ガイアの夜明け ニッポンを救え

編集・テレビ東京報道局

発行・日本経済新聞出版社

発行日・二〇〇九年八月三日

テレビ東京の経済ドキュメンタリー番組「ガイアの夜明け」から最新の20話を収録。海士町の細胞を生きたまま凍らせる冷凍装置CASを活用するイワガキ、シロイカの商品化への取り組みを紹介している。

書名・スロープ

著者・平田俊子

出版社・講談社

出版年・二〇一〇年一月二十九日

隠岐出身の作家が東京の鍋屋横丁の地名の由来からはじまり、母方の実家がある隠岐の話などをまとめた小説である。

隠岐の島町図書館（隠岐の島町西町吉田2-117・電話2-2341）では隠岐に関する書籍を集めています。平成二十一年度にこれらの新刊紹介以外の書籍がありましたらお知らせください。貴重な郷土資料として蔵書を致します。

「大般若波羅密多經全 600 卷修復」

知夫村文化財保護審議会委員長

山 穂

村の文化財に指定（平成7年4月1日）されているものの、その保存管理は多沢地区の住民が代々守り続けてきた。島前地区で600巻が完全な形で現存されているのは、知夫村の多沢地区だけのことで、大変貴重な文化遺産と言われている。その価値ある600巻の経典が、ここ数年、地区民や文化財保護審議会を悩ましてきた。それは経典の継目の蛇腹部分がボロボロになり、年一回行われる転読（てんどく）の際、本来一巻一巻バラバラとめくる行為すら危ぶまれ、虫干しも兼ねた行事にもかかわらず「それらしき仕草」で済まず状態となっていたからである。

又、虫除け樟脳を入れてはいても、虫喰い箇所は増える一方で、これはこれで頭の痛い問題となっていた。

保管は、多沢お堂の裏に大般若経収蔵庫（面積3坪）があり、木箱6個に100巻ずつきちんと納めてあるが、梅雨の頃の湿気は容赦なく箱の中へも影響を及ぼすものと思われる。

この経典は政治犯として京都から隠岐へ流され、多沢の地区に落ち着いた「速了和尚」が庶民から浄財を集めて京都から取り寄



せたものであり、時代的には文化3年（1806）から数年の間と推測されている。（知夫村誌より）そうであれば、すでにおよそ200年の歳月を経たことになり、丈夫な和紙製であろうとも、痛みが激しくなるのは当然の結果とも言える。

これまでも修復は度々行われ、その経過を良く存じている前教育長鹿島誠氏（米子市在住）に問い合わせたところ、氏も年月日まで覚えてないので、経堂の棟札を見るよう進言された。

その翌日、以前発行された「島前の文化財」第8号（昭和53年

7月30日、隠岐島前教育委員会事務局発行）を教育委員会から手渡された。

この中に、多沢の大阪若経について、渡部喜代一さん（元知夫郵便局長）が非常に詳しく述べている。それを読んで驚いた文が目に入った。「当経堂は、年一度の転読の行事のある時、又は特別な場合を除いて、中に入ることは固く禁ぜられているので、いつでも調査することは出来ない云々……」とあった。

知らなかったなら別だが、知ったからにはいくら何でも禁を破る訳にはいかない。となれば、今、調査確認の為と言えども、棟札を見るのを断念し、過去のことは鹿島氏の記憶に頼ることとなり、再度電話連絡をして、次のような経過を聞くことが出来た。

直近の修復は、鹿島巖村長時代の平成2年頃、京都の仏具屋を知夫に招いて、一週間程かかって補修をしたとのこと。広い場所が必要な為、開発センターを使って作業したと言う。

それ以前になると、およそ10年〜15年間隔で修復していたよう、嘉見村長、山田村長の時代にも行われていたはずと返答があった。

さて、前置きが長くなったが、鹿島前教育長の記憶からもわかるように、直近の修復からかなりの年月が経っていて、すでに過去の修復期間を上回っている。我々文化財保護審議会としても、年を追う度に痛みが激しくなるのを放置は出来ず、4〜5年前か

ら修復費を予算化してもらおうよう教育委員会を通じて村当局へ働きかける努力をするも、厳しい村財政では最先に切られる連続であった。

平成21年度予算要求の折も「ダメもと」のつもりで修復費の要求を出しておいたところ、意外にも当初予算に組んでもらえた。

その背景には、我々の執拗さが勝ったことその他「地域活性化生活対策臨時交付金」が大きく影響したようだ。

村の通常予算の範囲内では、とても処理至難の案件を続々とクリアし、余裕の出た村財政からの副産物が、今回の修繕に繋がったと思っっている。

なんであれ予算がついたからには事は早い。すでに見積もりをもらっている松江市の「小竹原彩潢堂」と本格的に交渉をし、修復経費945,000円（消費税込み）で契約をした。この業者は襖や掛け軸等の修復の専門家で和紙や糊にもこだわっていることを聞き及び躊躇無く選定した。

平成21年6月4日、萬康多沢区長と隠木哲朗教育長が、梱包された経典を「小竹原彩潢堂」へ搬入引き渡しをする。

そして、盆の直前に修復完了の連絡があったが、引き取りには9月1日に、区長、教育長が出向き、現場にて修復箇所を確認後、梱包をし、翌日隠岐汽船フェリーで到着した。直ちに役場職員を動員し、無事に元の収蔵庫へ納められた。

新装なって初めての転読行事は、11月9日願成寺口村弘澄住職のもと行われ、私も見学ながら参加を許され数巻をめくらせてもらったが、素人の自分でもパラパラと蛇腹がめくられて、とても良い高揚感を覚えたのが忘れられない。

この大般若経修復と同時進行で「後醍醐天皇御腰掛けの石」の柵修理も行い、審議会としては二つの懸案が達成された。これにより村や、地域住民に果報が訪れることを願ってやまない。